ニューヨーク育英学園 「バイリンガル講演会」/Japanese Children's Society, October 18, 2012

バイリンガル教育講演会 開催

2012年10月18日(木) NY育英学園



ニューヨーク育英学園(NY,NJ州 全日制部門,週末補習部門等 岡本徹学 園長 在籍者数計996名)では、コロ ンビア大学ティーチャーズカレッジの源 石(げにし)セリア教授を招き,「幼少 期におけるバイリンガル能カーさまざま な機会と現実的な選択(原題:The Gift of Childhood Bilingualism: Windows of Opportunity and Realistic Options)と題する,バイリ ンガル教育講演会を行った。

第二次世界大戦中,カリフォルニアの 日本人移民・日系人強制収容所で生まれ育 った源石教授は,戦後日本人家族の中で 育ちつつも,学校で日本人だと思われる ことを恥ずかしいと思うようになり,日 本語を学び使うことを拒否してしまった という悲しい経験をもつ。その経験が幼 少期におけるバイリンガル教育の大切さ を説くことに教授を駆り立てることとな ったと言う。

ー言にバイリンガルといっても,バ イリンガルを目指す子どもたちの環境は さまざまだ。母語の言語が何か,そして その母国の文化や社会的な環境,さらに 家族や学校での環境・立場から,子ども たちのバイリンガルを目指す意欲と方法 が変わってくる。

実際,会場にも全日制日本人学校部 門に子どもを通わせる家庭,現地校に子 どもを通わせる家庭,さらに保護者も両 親が日本人である場合と片親がアメリカ 人である場合,さらに数年後には日本に 帰国することになる家庭と米国永住予定 の家庭など,さまざまな背景を持つ保護 者約50人が集まった。

いくつかの幼少期のバイリンガル教 育の成功例とさまざまなバイリンガル教 育の方法を紹介しながら,源石教授が強 調したのは,バイリンガルになることの 素晴らしさと,母語を第一言語として学 ぶことの大切さ,そして子どもたちがバ イリンガルになることを支える保護者と 教育者の理解と協力の重要性。また,大 人のさまざまな思いはあっても最終的に 意欲的に学ぶ切っ掛けと目標を探し当て, バイリンガルになることを目指すまさに その主体は子どもたちである,というこ とを肝に銘じるべきであるということだ った。

講演後の質疑応答では、「母語を中 心とする学校に子どもがいる場合、何歳 ごろに現地の学校に移すべきか」といっ た質問や、「現地校にいくうちに、家庭 でも母語をあまり話さなくなり、話すと しても簡単な日常生活レベルのものなの だが、それでも家庭で日本語を使うこと を強要すべきか」といった質問など、さ まざまな質問が飛び交った。それらの質 問に対し、教授は、両親そして子ども自 身がどこにゴールを置くかによるが、よ り完璧なバイリンガルを目指すのであれ ば、とにかく母語も大切にするバイリン ガル教育を提供する学校を選び、両言語 を使う環境を学校と家庭で保ち続けるべ きだと答えた。

その後のアンケートでは, とても参 考になったという意見から, 講演内容が 日本人家庭に特化したものではなく, 一 般論であったため, 日本語と英語の二言 語のバイリンガルには当てはまらないの ではないかという疑問まで, まさしく多 種多様で, 問題もその解決・対処法もそ れぞれ多様にあることが浮かび上がった 結果となった。

NY育英学園では、子どもたちのさ まざまなニーズに応えるため、全日制日 本人学校部門から十曜日、日曜日のサタ デースクール、サンデースクール、放課 後のアフター日本語補習プログラムまで、 個々のニーズに応えるさまざまなプログ ラムを用意している。また、全日制小学 部部門は、昨年から毎日一時間の英語に 加え、金曜日を一日英語で現地校のよう に過ごすイマージョンプログラムを開 発・実施し、より効果的なバイリンガル プログラムが提供できるよう、絶えず挑 戦している。今回の源石教授との交流も その一環であり、学園では、今後もさま ざまなバイリンガル教育の講演会・座談 会を設け、学校と家庭との協力関係を深 め、役に立つ情報を発信していくとのこ と。

週刊NY生活 No.419・11/10/2012号 掲載

週刊NY生活・アメリカの学校紹介と学生ライフのページ

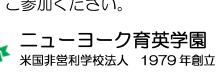
	イリンガル教育の成功例や「子供がいる場合、何歳ごろでは、一部では、幼少期のバーの時代で、「日本御学園長、在籍者数」ンガルになることの素晴では、「日本御学園長、在籍者数」ンガルになることの表情では、「日本御学園長、在籍者数」ンガルになることの表情では、「日本御学園長、在籍者数」ンガルになることの素晴では、「日本御学園長、在籍者数」ンガルになることの素晴では、「日本御学園長、在籍者数」と、「日本御学園長、在籍者数」として学ぶことの大切さ、子の方法を紹介しながら、バイ	コロンビア大の源石バイリンガル教育
定会ながに 定会ながる で、 がその で、 が が で の で た で の の す た で の の す た で の の で し た れ た で の の で し た れ た で の の で で の の で し た れ れ さ っ む の で ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の ん た で の の の の た で の の う た で の の う た で の の う た で の の う た で の の う た で の の う た で の の う た で の の う た で の の う の 、 の の う で の の う で の の う で の の う で の の の の の の の の の の の の の	(特別の) 「 「 「 「 「 「 「 「 」 」 に 現 地 の で は 、 子 一 言 語 と 一 言 語 た 、 、 子 一 に 現 地 の で あ れ 」 な ど 、 、 子 一 に 現 し 、 、 子 一 に 弱 れ 」 な ど 、 、 子 一 間 に 対 し 、 子 一 間 に 対 し 、 子 一 間 に 対 し 、 子 一 間 に 対 し 、 子 一 間 に 対 し 、 子 一 間 に 対 し 、 ガ 一 で あ れ ば 、 、 子 一 間 に 対 し う 衆 で あ れ ば 、 、 子 一 に 見 れ が 、 で あ れ ば 、 、 、 本 た 。 で あ れ ば 、 、 、 ち に 男 し 、 で あ れ ば 、 、 、 ち に 見 し 、 、 た 。 、 、 た 。 、 、 ち に 見 、 が 、 、 ち に 見 し 、 、 、 ち に 、 、 ち に 見 、 、 、 ち に 見 、 、 、 ち に 、 、 、 、 ち に 見 、 、 、 ち に う 、 、 、 ち に う 、 、 ち に う 、 、 ち に う 、 、 ち に う 、 、 ち に う た 。 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	政援講演



幼児期におけるバイリンガル教育の分野において、米国 コロンビア大学ティーチャーズカレッジで教鞭をとってお られる源石教授をお招きし、幼少期(2~12歳)の子ども たちの言語習得能力と環境の多様性、そして複数言語の習 得過程における、子ども・教師・保護者が直面するさまざ まな葛藤・問題、そして喜びについて、

いろんなケースを例に挙げながらお話 いただきます。講演は英語でなされま すが、日本語の通訳が入ります。是非、 ご参加ください。







日時	10月18日 (木)
	9:15-10:15
場所	NY育英学園 体育室
参加費	無料

※講演は英語でなされます。(通訳付き)
 ※車でお越しの場合,路上駐車をお願いいたします。(Sylvan Ave./Lemoin Ave./9W)

Japanese Children's Society Inc.

8 West Bayview Avenue Englewood Cliffs, New Jersey, 07632 Phone: (201)947-4832 Fax: (201)944-3680 E-mail: info.nyikuei@gmail.com ニューヨーク育英学園 「バイリンガル講演会」/Japanese Children's Society, October 18, 2012

NY IKUEI LECTURE : Raising Bilingual Children

Please join us on Thursday, October 18, 2012 at 9:15 AM in the Japanese Children's Society's Gym for the guest speaker presentation "Raising Bilingual Children : Promise and Challenge " by Professor Celia University. Genishi of Columbia Professor Genishi will speak about the of children's literacy diversity and acquisition background language and merits of being bilingual, how to acquire or retain bilingualism or other languages. Professor Genishi will also speak about challenges for children coming from non-English speaking homes or Japanese American children who are learning Japanese as a heritage language and trying to maintain the identity as Japanese and give some suggestions to their parents.

About Dr. Genishi (源石先生について)

Celia Genishi is professor of education and program coordinator of the Early Childhood Education program, the Department of Curriculum and Teaching at Teachers College, Columbia University. She is a former secondary Spanish and preschool teacher and now teaches courses related to early childhood education and qualitative research methods.

Educational Background (学歴)

- B.A., Barnard College (Spanish Literature)
- M.A.T., Harvard University (Teaching Modern Foreign Languages)
- Ph.D., University of California, Berkeley (Early Childhood Education, Language and Reading Development Program)



Selected Publications (主な著書)

- Children, Language, and Literacy: Diverse Learners in Diverse Times
- Ways of Assessing Children and Curriculum; Ways of Studying Children
- The Need for Story: Cultural Diversity in Classroom Community

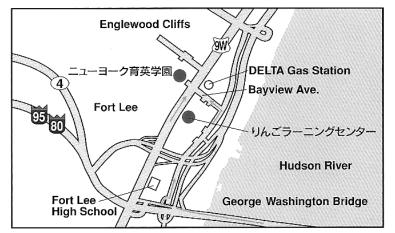
Application for the Lecture (参加申込方法)

どなたでも参加できます。10月15日(月)までに, NY育英学園 講演会窓口まで直接,あるいはお電話 (201-947-4832),E-mail(info.nyikuei@gmail.com)でお 申込みください。その際,お名前,参加人数をお伝えく ださい。

Please apply to Japanese Children's Society Attn. Oct. 18th Lecture on phone or E-mail by Monday, October 15th.

学校法人 ニューヨーク育英学園

Japanese Children's Society, Inc. 8 West Bayview Ave., Englewood Cliffs, NJ 07632 Phone:(201)947-4832 Fax:(201)944-3680 HP: http://japaneseschool.org E-mail: info.nyikuei@gmail.com



Japanese Children's Society Inc. ニューヨーク育英学園 NY IKUEI LECTURE

The Gift of Childhood Bilingualism:

Windows of Opportunity and Realistic Options

幼少期におけるバイリンガル能力

さまざまな機会と現実的な選択

AGENDA

- ◆ 1. Introductions
 はじめに
- ◆ 2. Windows of Opportunity
 さまざまな機会
- ◆ 3. Realistic Options
 現実的な選択
- ◆ 4. Questions and Answers 質疑応答
- 資料: "Debunking the Myths of Multilingualism" 「マルチリンガル神話の虚偽を明かす」

2012年 日時 :10月18日 (木) 9:15-10:15 場所 :NY育英学園 体育室 講演者:コロンビア大学 ティーチャーズカレッジ 教育学 教授 げにし 源石セリア忍 教授



米国非営利学校法人 1979年創立

アンケート調査 (10 月 18 日)		
	←いいえ	はい→
◆ 今日の講演会は、参考になりましたか。	(1234	5) 程度を示す数字に〇
◆ 今後どのような講演会を希望しますか?		

◆ 下記につきまして、可能な限りお答えください。OPrimary(主に使用), △Secondary(ときどき使用)

	家庭での言語環境	○△で囲む	育った国 〇ム		言語力自己診断 〇
父親	日本語・英語 その他()	日本・アメリカ その他()	日本語:初緒1 2 3 4 5 (祈が) 英語 :初緒1 2 3 4 5 (祈が)
母親	日本語・英語 その他()	日本・アメリカ その他()	日本語:祕者12345(祈が) 英語 :祕者12345(祈が)

	0	家庭での言語環境 ○△	学校での使用言語 ○△	育った国(〇~〇才)	言語力自己診断 〇
子1	男 女	日本語・英語・ その他()	日本語・英語・ その他()	日本() アメリカ() その他()	日本語:
子2	男 女	日本語・英語・ その他()	日本語・英語・ その他()	日本() アメリカ() その他()	日本語:
子3	男 女	日本語・英語・ その他()	日本語・英語・ その他()	日本() アメリカ() その他()	日本語:祕者1 2 3 4 5 (祈が) 英語 : 祕者1 2 3 4 5 (祈が)
子4	男 女	日本語・英語・ その他()	日本語・英語・ その他()	日本() アメリカ() その他()	日本語:祕者1 2 3 4 5 (祈が) 英語 : 祕者1 2 3 4 5 (祈が)

◆ 現在,お子様の言語教育でどんなことを悩まれていますか。

ご協力どうもありがとうございました。

Debunking the Myths of Multilingualism

Published in <u>Inside - Volume XVI, No. 6</u> (Newsletter of Teachers College, Columbia University) 3/29/2011



Fact or myth? Children are linguistic sponges who will pick up any language if exposed early enough.

Myth, says Celia Genishi, Professor of Education. In reality, kids make "sociolinguistic choices"; witness her own story. Genishi spent part of her youth in a Japanese internment camp during World War II, where her parents spoke Japanese with their friends. As she grew older, however, Genishi felt embarrassed when she used Japanese words with her peers. She rejected the language, even though it had surrounded her from her earliest days.

Bi- and multilingualism seem to inspire mythmaking, perhaps because they break down traditional (and, for some, reassuring) barriers between people. At the panel at which Genishi and several other TC faculty spoke in mid-February— "Bi- and Multilingualism in Young Children: Supporting Families, Cultivating Linguistic Diversity"—several other myths were debunked.

MYTHS

One was the **notion that multilingualism leads to language delays**. Children learning multiple languages may, in fact, take a bit longer to start speaking, but often their grasp of linguistic principles is more sophisticated once they do begin speaking. Meanwhile, "some children have disabilities and they are bilingual but it is not caused by the bilingualism," said Patricia Martinez ALVAREZ?, Visiting Assistant Professor of International and Transcultural Studies, adding that <u>a true disability will show up in both languages.</u>

In fact, <u>multilingualism is associated with certain cognitive benefits</u>, <u>such as better executive control</u>, <u>divergent thinking</u>, <u>and communicative sensitivity</u> (the ability to understand the needs of the listener). Multilingual people do have more "tipof-the-tongue" moments, searching for the right word, but that's because they have more words to process.

Another myth: the idea that "code mixing"—changing from one language to another within the same utterance or written text, a common practice in societies in which two or more languages are used—is a sign of linguistic confusion. In fact, said Maria Souto-Manning, Associate Professor of Education, children use all the language at their disposal to make sense of the world around them. <u>Code mixing can be very rich, linguistically, and is often quite grammatical</u>.

And still another myth: **Even if bilingualism has benefits, it will hamper English language learning**. In fact, said Maria Torres-Guzman, Professor of Bilingual Education, there are no studies proving that <u>knowing another language harms</u> <u>English acquisition</u>. The real problem is inconsistency; if a child's schooling isn't consistent, he or she will have a hard time learning English. In addition, children who are not native speakers may have difficulty functioning when academic English is used, because they encounter words that have not previously come up in every day use. Adults who are aware of this difference can help children acquire the vocabulary they need. And <u>if students have a strong foundation in one</u> language, they will eventually be able to transfer those skills to a second language.

Tori Hunt, Instructor of Curriculum & Teaching, was the only person on the panel raised in an English-only household, and she agreed with the others that multilingualism is a gift, not a liability. "I felt like I was at somewhat of a disadvantage because I was never given a second language," she recalled. "So I have dragged my children every Saturday to Chinese class."

All of the panelists stressed the <u>importance of giving children opportunities to use their languages while understanding</u> that they may not embrace a language in the way their parents want them to. Some children will refuse to speak in a different language with a parent they know speaks English. One solution in that situation, Torres-Guzman said, is "the grandmother effect": interactions with relatives who only speak the other language.

That observation brought the conversation full circle to Genishi. <u>Children, she said, are "agents in charge of their own language stories</u>."

マルチリンガル神話の 虚偽を明かす

Debunking the Myths of Multilingualism(日本語訳版) Published in Inside - Volume XVI, No. 6 3/29/2011 (コロンビア大学ティーチャーズカレッジのニュースレターより)



子どもは、早いうちに他言語に触れれば、どんな言語でもスポンジのように吸収することができる。果たしてそれは、真実 かそれとも神話か?

「神話です」と,教育学部教授の源石セリア教授は言う。実際には、子どもたちは、「社会言語学的な選択」をするのだと、 自分自身の体験をもとに教授は言う。源石教授は第二次世界大戦中、幼少期の数年を日本人捕虜収容所で過ごした。収容所で は両親が友人たちと日本語で話していたので、日本語に触れる環境の中で教授は育ったが、成長するにつれ、源石教授は友人 と日本語で話すのを恥ずかしく感じるようになったと言う。幼少期に日本語に包まれる環境にあったのにもかかわらず、教授 は日本語を拒絶しまったのだ。

バイリンガルやマルチリンガルというのは、どうやら神話を作りやすいものなのかもしれない。それはおそらく、人々の間の伝統的な(そしてある人々にとっては安心させる)壁を壊すものだからだ。2月半ばに行われた「幼少期の子どもたちのバイリンガルとマルチリンガル能力:家族を支え、言語の多様性を育む」と題するパネルディスカッションにおいて、源石教授の他、数名のティーチャーズカレッジ教授たちは、その他のいくつかの神話の虚偽を明かした。

「神話その1.マリチリンガルは言語の遅れを引き起こす。」

多言語を学ぶ子どもたちは、実際、話し始めるのに少し時間が必要かもしれない。だが多くの場合、彼らは一度話し始める と、彼らの言語学的原理の理解は、より洗練されたものであるということができる。その一方で、「障害を持っている子ども たちがいる場合、彼らはバイリンガルではあっても、その障害はバイリンガルだからそうなったわけではない」のだとパトリ シア・マルチネス客員助教授(インターナショナル・異文化学)は言う。そして、「本当の障害は両方の言語に現れることに なる」と付け加えた。

実際、マルチリンガル能力は、ある認知上の恩恵、例えば実行調節機構(executive control*)、拡散的思考、そしてコミュニケーション上の気配り(聞き手が何を求めているか理解することができる能力)といった効果を伴うのだ。マルチリンガルの人々は、よりふさわしい言葉を捜して、「喉まで出かかっているのに思い出せない」といった状況に陥りやすいが、それは彼らがより多くの言葉を処理しているからなのだ。

「神話その2.コード・ミキシング(話している最中や書いている途中で,ある言語から別の言語に切り替わるといった,2 言語以上の言葉が使用されている社会では当たり前のこと)は言語上の混乱の現れである。」

実際には、子どもたちは身の回りの世界を理解するのに、全ての言語を自由に使うことができるのだとマリア・ソトウ・マニング助教授は言う。コード・ミキシングは、ある面、非常に言語学的にリッチで、たいていとても文法的でもあるのだ。

「神話その3.バイリンガルである利得はあっても、英語の習得の障害になる。」

実際には、他言語を知っていることが英語習得の妨げになると証明している研究は全くないのだと、バイリンガル教育教授のマリア・トレス・ガズマン教授は言う。本当の問題は、一貫性のなさにあるのだと。つまり、ある子どもが一貫した教育を受けていないと、その子は英語を学ぶのに苦労するのだと言う、さらに、ネイティブスピーカーでない子どもたちは、アカデミックな英語が使われるとどうしたらいいか分からなくなることがあるという。それは、彼らは、普段使用していない、知らない言葉に出くわしてしまうからだ。これらの言葉遣いの違いを知っている大人たちは、子どもたちに必要な語彙を覚えるのを助けてあげることができるだろう。そして、もし子どもたちが、しっかりとした言語の基礎をある一つの言語で築き上げていれば、彼らはいずれはそれらの能力を第二言語に応用させることができるのだ。

カリキュラムと教授法の講師,トリ・ハント講師は,パネリストの中で唯一,英語のみの家庭環境の中で育った人物だった が,彼女はマルチリンガルであるということは重荷なのではなく,ギフト(ありがたい授かりもの)だということに同意する。 「私は第二言語を与えられなかったので,少し不利だと思うことがありました。なので,(今)私は自分の子どもたちを,毎 週土曜日,中国語のクラスに無理やり通わせているんです。」

パネリスト全員が、親たちが自分たちが思っているようには子どもたちがある言語を受け入れないかもしれないということ を理解した上で、子どもたちに複数の言語を使用する機会を与える大切さを強調した。子どもたちの中には、英語を話すと分 かっている親の前で他の言語で話すことを拒む子がいるかもしれない。こうした状況での一つの解決法は、「おばあちゃん効 果」(他の言語しか話さない身内との交流)だと、トレス・ガズマン教授は言う。

その所見を聞いて,源石教授は,「子どもたちは,自分たち自身の言葉のストーリーを担っている主体なのです。」と話を まとめた。